

令和5年度病害虫発生予察情報

発生予報第1号

令和5年4月26日

発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲 (育苗期)	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	天候予報(4月20日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は、期間の前半は平年より低く、後半は平年並と予想されている(+)。 近年の発生は少なく推移している(-)。	急激な温度変化や、過湿・乾燥の繰り返しは発生を助長するため、適切な温度管理を行う。 育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスのこまめな開閉等によりハウス内の温度調節に注意する。
	もみ枯細菌病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並である(±)。 天候予報によると、向こう1か月の気温は、期間の前半は平年より低く、後半は平年並と予想されている(±)。	育苗期間中は28℃以下の温度管理を徹底する。 育苗器内の温度は、付属センサーだけではなく温度計を併用し、育苗ムラに注意する。 育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスのこまめな開閉等によりハウス内の温度調節に注意する。
	苗立枯細菌病	全 域	—	平年並		
	イネミズゾウムシ	全 域	早い	やや多い	有効積算温度によるシミュレーションでは、 水田侵入盛期は早い と予想される。 昨年の発生ほ場割合は平年より高かった(+)。	水田侵入盛期が移植時期と重なる場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。
	イネドロオイムシ	全 域	やや早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、 水田侵入盛期はやや早い と予想される。 昨年は、中通りの一部で発生程度の高いほ場がみられたが、発生ほ場割合は平年並だった(±)。	幼虫期に低温が続く場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。 チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されているため、効力低下が認められる場合には、薬剤を変更する。
麦 類	赤かび病	全 域	早い	平年並	農業総合センターによる作柄解析試験の結果から、 出穂期は平年と比べて早い と予想される。 天候予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている(±)。	防除時期や薬剤等については、令和5年4月17日付け防除情報を参照する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	うどんこ病	全 域	—	平年並	4月中旬の花そう葉での発生は、平年同様に確認されなかった(±)。	発病葉は見つけしだい、せん除して園外に持ち出すなど適切に処分する。
	リンゴハダニ	全 域	—	平年並	令和4年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年並であった(±)。	越冬卵密度の高い園地では、発生密度に注意し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全 域	早い	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年発生が多かった園地や、現在、花や新梢に食害が見られる園地では、落花直後の防除を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
モ モ	せん孔細菌病	全 域	早い	平年並	4月中旬の県北地域の巡回調査ほ場(品種「あかつき」)において春型枝病斑の発生は確認されなかった(-)が、参考調査の「ゆうぞら」ほ場や他地域のほ場で春型枝病斑の発生が確認されている(+)。今後まとまった降雨があった場合、感染拡大が懸念される。	春型枝病斑は見つけしだい、せん除して適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する(令和5年4月21日付令和5年度病害虫防除情報「モモせん孔細菌病」参照)。
	モモハモグリガ(第1世代幼虫)	全 域	早い	多い	令和4年12月実施の越冬量調査において、越冬成虫の発生地点割合は、平年より多かった(+) 。	初期の発生密度を抑えたいうえで、複合交信かく乱剤を設置する。農業総合センター果樹研究所において第2世代の防除適期が5月5～6半旬頃になると予測されているので、本種に効果のある剤を必ず散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全 域	早い	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
ナ シ	黒星病	全 域	早い	平年並	4月中旬の芽基部病斑の発生ほ場割合は平年より少なかった(-)が、昨年秋期に各地で子のう胞子の発生源となる秋型病斑の発生が確認されている(+)。今後まとまった降雨があった場合、感染拡大が懸念される。	りん片が付着したままの花そうは、芽基部病斑の可能性が高いので、見つけしだい除去し、適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する(令和5年4月21日付令和5年度病害虫防除情報「ナシ黒星病」参照)。
	ハダニ類(リンゴハダニ、クワオオハダニ)	全 域	—	平年並	令和4年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年並であった(±)。	越冬卵密度の高い園地では、発生密度に注意し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全 域	早い	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年発生が多かった園地や、現在、新梢に食害が見られる園地では、落花1週間後の防除を実施する。 複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ	<p>■腐らん病 今後降水量が多くなると、感染が拡大するおそれがあります。防除を徹底しましょう。 ほ場での発生状況をよく観察し、本病が発生している枝や幹の発病部位は、徹底して除去しましょう。枝腐らんは健全部5cm以上含めてせん除し、胴腐らんは、周囲の健全部5cmまで広く削り取ってください。切り口には必ず殺菌塗布剤を塗布し、感染を防止しましょう。また、除去した発病部位は伝染源となるおそれがあるので、園外に持ち出し適切に処分しましょう。 「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので早期に摘果を実施しましょう。</p> <p>■黒星病 本病の最重点防除時期は、展葉期から落花20日後頃であるので、この期間の薬剤散布間隔があきすぎないように注意し、散布ムラのないよう十分な量を散布しましょう。 青森県をはじめ他のリンゴ主産県で本病の重要防除剤であるDMI剤の耐性菌の存在が確認されています。本剤耐性菌がまん延すると防除薬剤の効果が低減するおそれがあるので、DMI剤の使用回数に留意しましょう。また、他県からリンゴ苗木・穂木等を導入する際は十分注意しましょう。 病害虫防除所HP「注意喚起 他県でのリンゴ黒星病におけるDMI剤耐性菌の発生について」 http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html</p> <p>■褐斑病 昨年10月の新梢葉における本病の発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況でした。本病原菌は主に罹病落葉で越冬し、翌年5～6月に子のう胞子を飛散します。 例年発生がみられるほ場では、「農作物病害虫防除指針」や各地域のリンゴ防除暦を参照し、落花直後、落花30日後に本病に効果のある薬剤を散布して初期の感染を抑えましょう。</p>
果樹類 (モモ、スモモ、ウメ等)	<p>■クビアカツヤカミキリ 近年、北関東の隣接県まで特定外来生物であるクビアカツヤカミキリの発生が確認されており、警戒が必要です。発生を疑わせる事例を確認した場合は病害虫防除所までご連絡ください。 本種の幼虫は、サクラや果樹類(モモ、スモモ、ウメ等)の樹の内部を食い荒らし衰弱させ、2～3年間樹内で成長し、6月中旬～8月上旬頃に成虫となって樹木の外に出ます。成虫の体長は約2～4cmで、全体が光沢のある黒色をしており、前胸部が赤いのが特徴です。疑わしいフラス(木屑と虫糞が混じったもの)や成虫を確認した場合は、病害虫防除所までご連絡ください。 病害虫防除所HP「注意喚起 外来カミキリムシ類の情報提供にご協力願います」 http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/gairai-kamikiri.html</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった(－)。	多発すると防除が困難になるので、発生初期から薬剤防除を実施する。
	灰色かび病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった(－)。	過湿にならないよう換気を行う。 発病果や罹病した果梗、老化葉などはハウス内に放置しない。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった(+)。	低密度時から薬剤防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤感受性が低下しやすいので、薬剤の効果を確認し、気門封鎖剤も含めて系統の異なる薬剤をローテーション散布する。 天敵製剤(ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ)を放飼している場合は、ハダニ類の発生状況に応じて、天敵に影響の小さい薬剤を選択する。
	コナジラミ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年より高かった(+)。	排泄物に発生するすす病は果面の汚れによる品質低下を招くので、発生密度に注意し、薬剤防除を実施する。 コナジラミ類については侵入を防ぐとともに野外の分散を防止すること。
アザミウマ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(－)。	発生が多くなると果実被害が生じるので、低密度時から防除を実施する。	

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

イチゴ	<p>■萎凋病、萎黄病、炭疽病</p> <p>これらの病害を防ぐためには、まず無病地からの採苗、育苗を徹底することが基本的対策となるため、ほ場で発病が確認されている場合は次年度に向けて以下の対策を実施してください。①育苗用土壌やポット等の資材を一斉に更新する。②炭疽病は水媒伝染するため、親株を育苗する際は高設育苗を行うとともに、頭上からの灌水を避ける。③発病株、または発病が疑われる株は、見つけしだいその周囲の株と土を含めて丁寧に抜き取り、適切に処分する。④これらの病気が発生したほ場で連作せざるを得ない場合は、土壌消毒を実施する。</p> <p>なお、イチゴの土壌病害の簡易検定方法について、病害虫防除所ホームページの病害虫ライブラリー(野菜花き類の病害虫、イチゴの病害)に掲載しているので参考にしてください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433111.pdf</p>
-----	---

より詳しい発生状況や防除対策は、福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。
お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。